
本学におけるFD活動の一環として実施しております「授業アンケート」へのご理解とご協力を感謝申し上げます。今回のFDニュースでは、平成30年度教育学部前期授業アンケート、平成30年度第1回FD研修会及び平成30年度京阪奈三教育大学FD交流会の実施結果について、報告いたします。

また、滋賀県立大学主催のFD研修会に参加されました理学科・向井 浩教授からも当日の様様をご報告いただきましたので、併せて掲載させていただきます。

1. 平成30年度 教育学部前期授業アンケート

1. 調査の概要 (図 1.1, 1.2, 1.3)

実施期間：2018年7月10日(火)から8月1日(水)の3週

調査対象科目：受講登録者6名以上の全授業(集中講義と不特定科目は対象外)

1.1. 対象科目数：371科目

うち実施科目数：320科目(調査実施率は86.3%)

(調査票が未回収の科目は51科目、調査票の全てが白紙の科目は0科目)

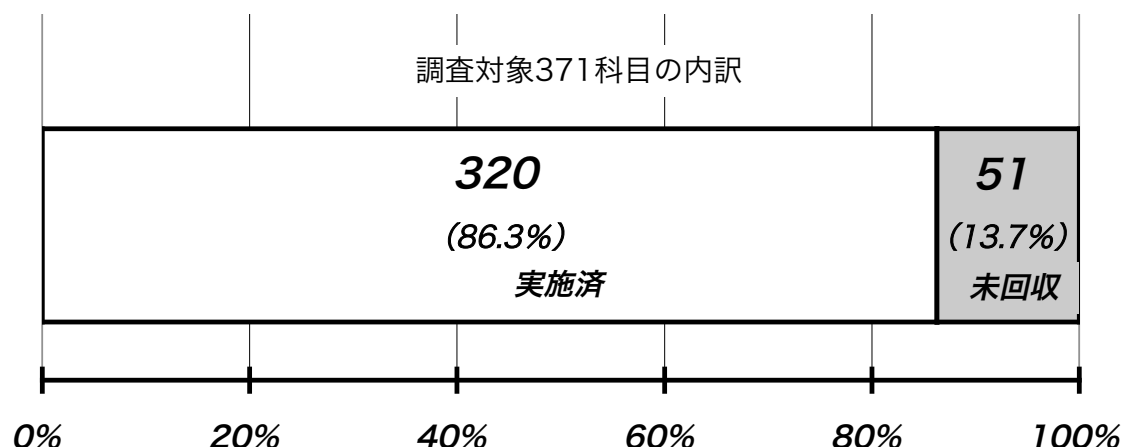


図 1.1. 調査実施科目と調査票未回収科目数 (調査実施率は86.3%)

1.2. 実施科目の履修者数：12,306名

うち有効回答者数：10,043名(実施科目に対する回答率は81.6%)

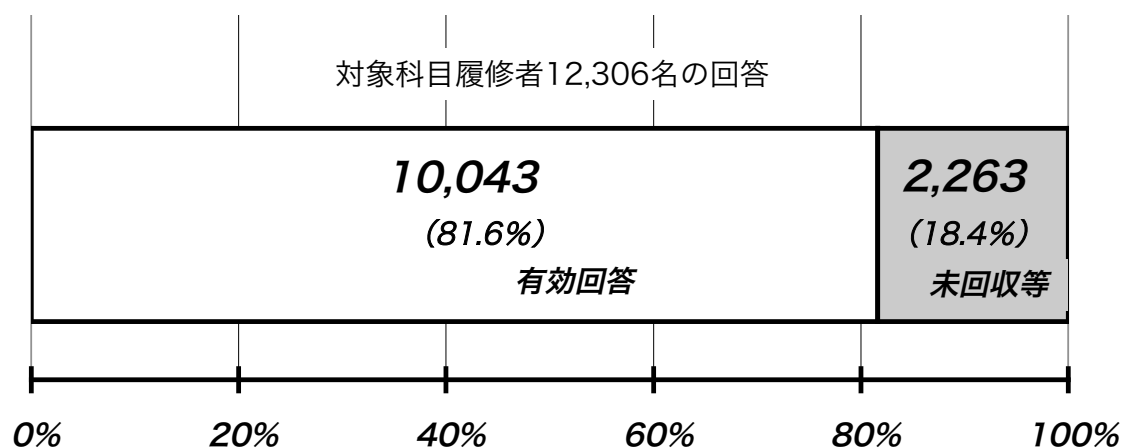


図 1.2. 対象科目履修者(延べ)の回答状況(実施科目に対する有効回答率は81.6%)

1.3. 調査実施率と回答率の経年変化

調査実施率は85%超，回答率は80%超という傾向は，従来と同水準である。

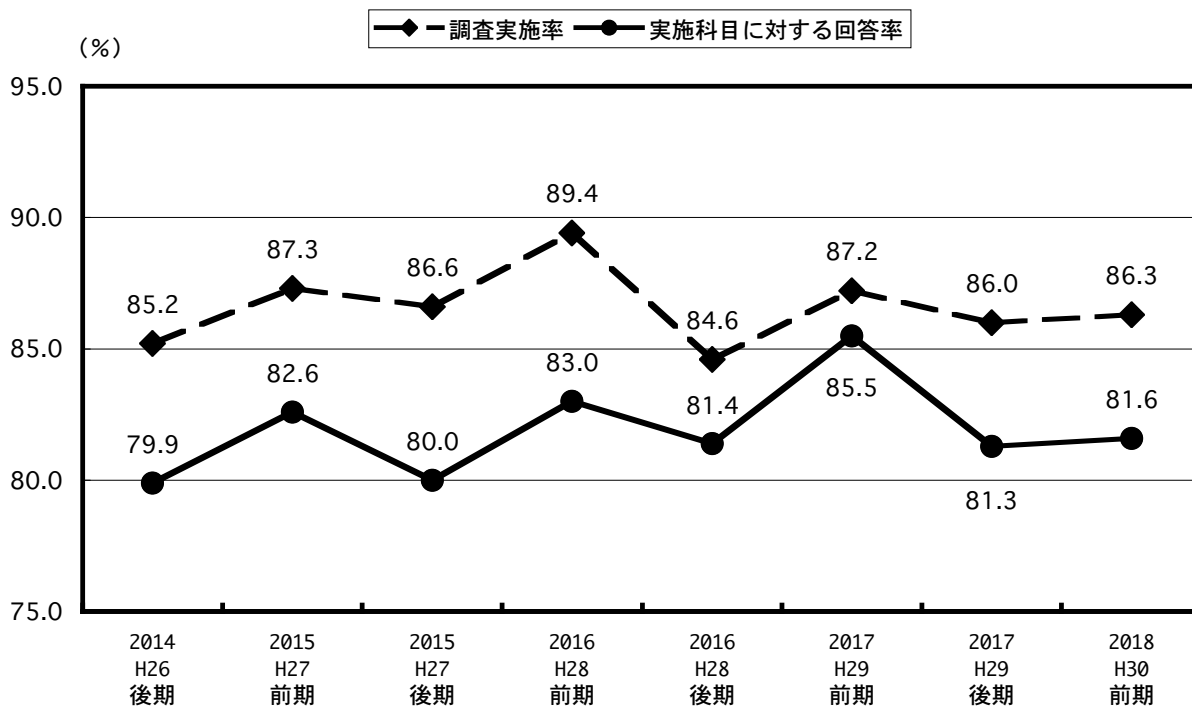


図 1.3. 調査実施率と実施科目に対する回答率の経年変化

2. 調査結果の概要

2.1. 当該科目の受講動機 (図 2.1)

当該科目を受講した動機は、「必修だから」という回答が最も多く，次に「興味・関心」が続いた。この質問は複数回答を認めているが，10,043 通の回答のうち，複数回答は 557 (回答総数が 10,600) にとどまっており，「必修」かつ「興味・関心がある」という回答がもう少し増えてもよいと期待される。このことは，従来と同様の傾向である。

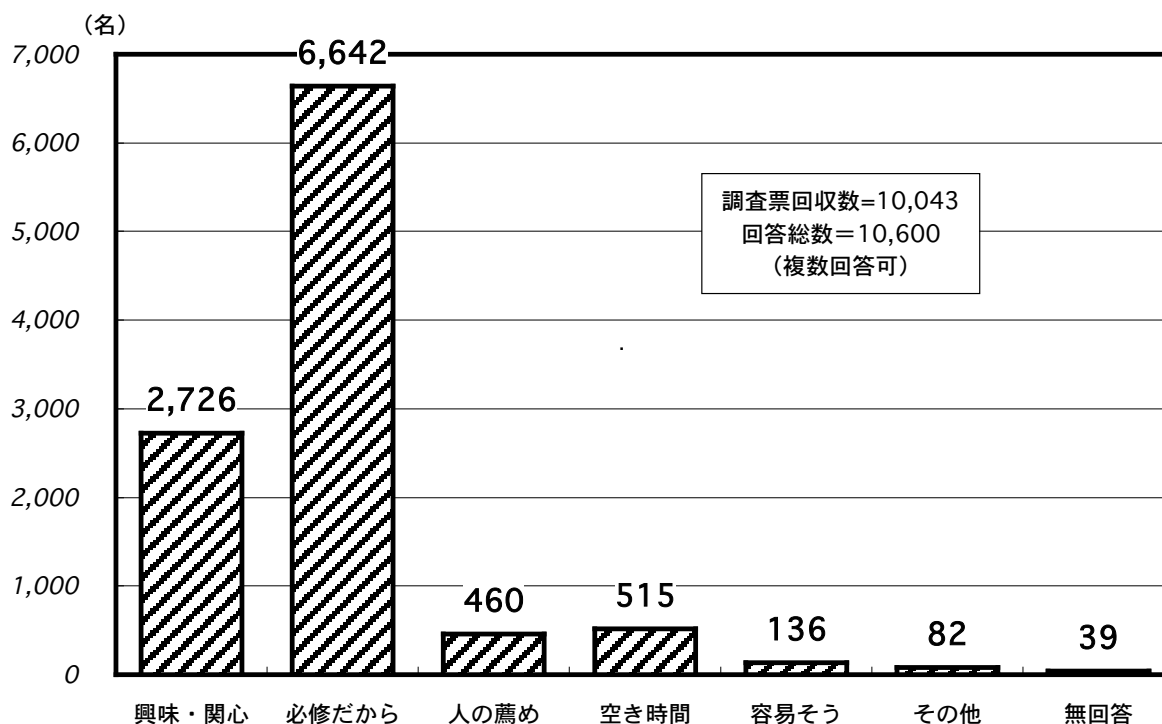


図 2.1. アンケート回答科目に関する受講動機の内訳

2.2. 回答用紙を提出した学年の分布（図 2.2）

授業アンケートの回答用紙を提出した履修生の学年は、1・2回生を中心に、学年があがるほど履修科目数が少なくなることから、例年同様、減少する傾向が認められた。

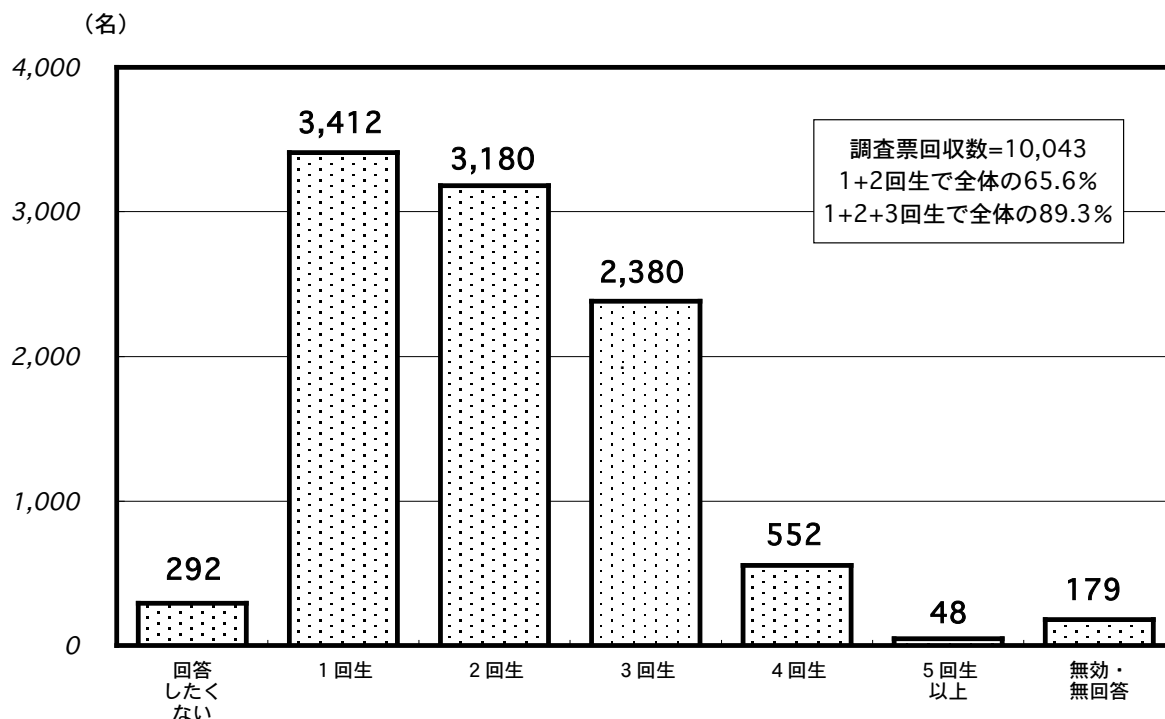


図 2.2. 提出された回答用紙の学年別状況

2.3. 質問項目ごとの回答の内訳（図 2.3）

Q2 からQ15 までの回答は 4 段階の択一選択式となっているので、上下 2 項目ずつで分断し、肯定的な回答と否定的な回答とに分けて結果を解釈すると、肯定的な回答が多いと考えられる。これは、従前からの傾向と同様である。

しかし、Q2 シラバスの参考状況（2,220 名，22.1%），Q4 授業時間外の学習（2,378 名，23.7%）には、「ほとんど〇〇〇ない」という回答（図 2.3 中の左側黒い部分）が目立つ。これらの点も、従前同様、授業アンケート結果を受けて改善していくべき課題として位置づけられている項目である。

2.4. 平成 30 年度から文言を修正した項目（図 2.4）

Q9 教員になる意欲を高める内容の項目は、今期の調査票から文言を修正した。具体的には、受講生自身の変容を問うのではなく、授業内容を評価するための質問として

旧 Q9 「あなたはこの授業を受講して教員になる意欲や動機が高まりましたか」

新 Q9 「この授業には、教員になる意欲を高める内容や取り組みが含まれていたと思いますか」

という形に修正した。この項目について、昨期の回答状況と比較したところ、無効・無回答数を考慮しても、全体的に肯定的な回答の側へシフトしたと判断することができる。従来の質問の仕方では、授業を受講する以前から教員になることに意欲的な学生が

回答の選択肢に困ったり、また反対に、今年度の質問の仕方では、あまり意欲でない学生であっても授業を客観的に捉えた回答状況になった、等の可能性が考えられる。

「FD・授業アンケート」の性格を踏まえれば、よりの確な質問項目になったということができる。

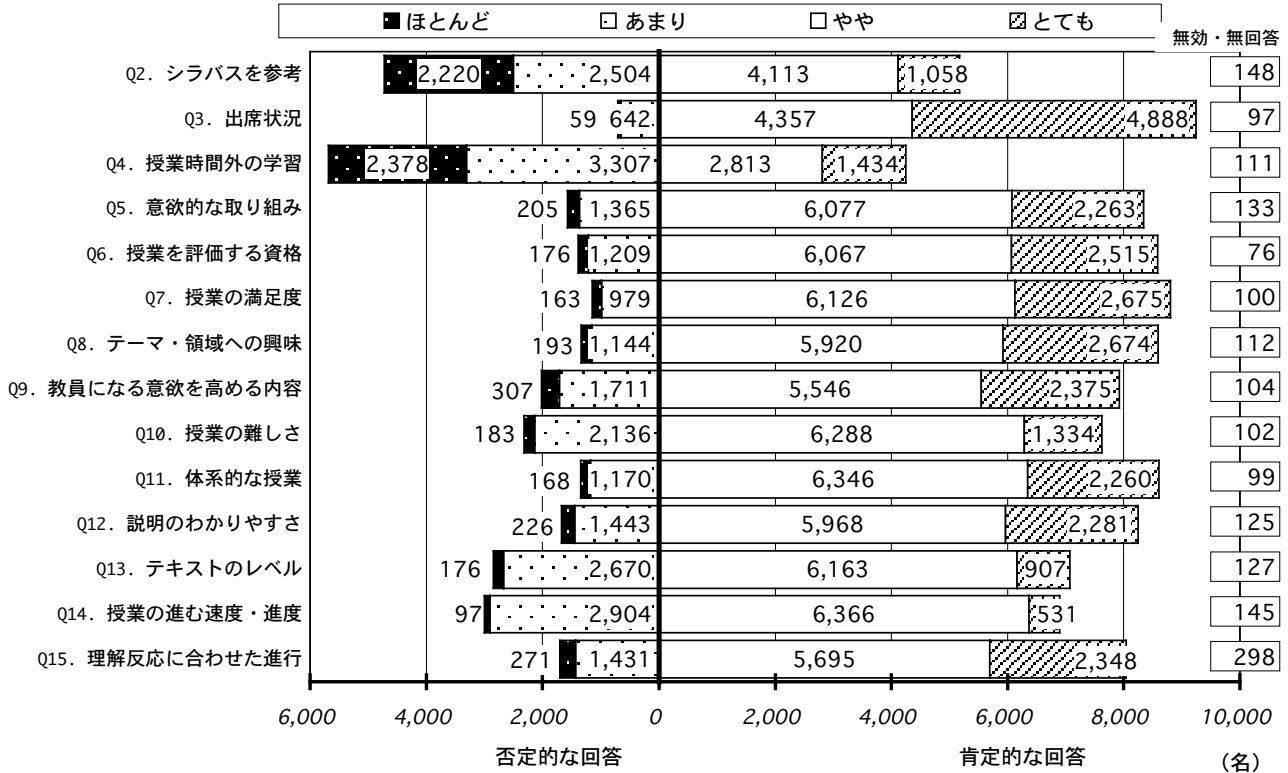


図 2.3. 質問項目ごとの回答の内訳 (全回収数は 10,043 通, 有効回答率は 81.6%)

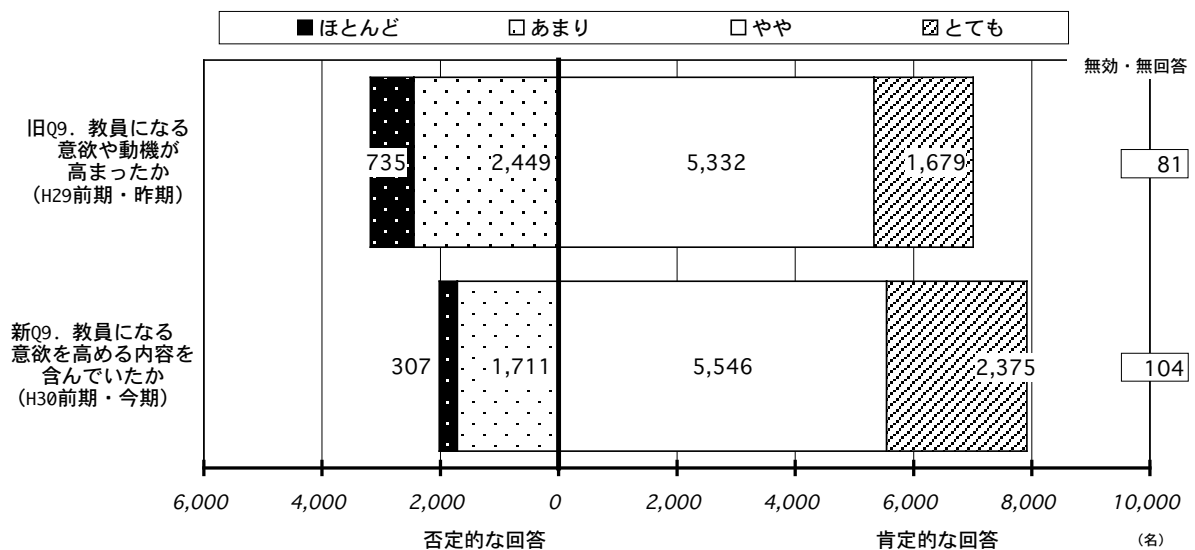


図 2.4. 今期から文言を修正した Q9 に関する回答状況の比較

2. 平成30年度 第1回FD研修会

「学生が意欲を持って取り組む授業」

講師：教職キャリア高度化センター 西井 薫 教授

橋本 京子 教授

平成30年の第1回目のFD研修会が、平成30年11月21日（水）13:00～13:50に本学大会議室において開催されました。参加者73名という盛況の中、本学教職キャリア高度化センター西井薫教授、橋本京子教授に「学生が意欲を持って取り組む授業」についてお話を頂きました。

前半は西井薫先生が「初等教育実践基礎演習」の概要を説明されました。「初等教育実践基礎演習」は模擬授業を行う授業であり、演習なので講義とは異なる学習形態であること、自らの学びを創り出すこと、演習は1人で行うが活動はグループで行うため相互啓発すること、時間厳守、提出物は必ず提出するなど心得を決めておられました。また、模擬授業の作成に向けてグルーピングをする際に、なるべく他専攻の学生同士が組むようにする、自己紹介と他己紹介をするなど相互理解とコミュニケーションを促す具体的な工夫もご紹介いただきました。模擬授業の授業分析は観察の着眼点が明確化されており、【先生の指示】はわかりやすかったか（何をどのようにするのがよくあったか）など、先生の指示や発問、説明についての評価、【板書】は、正しく見やすかったか（字の正しさ、大きさ、書かれた位置、色、筆順等）、

【教材・教具の利用】で、学習がわかりやすくなったか（カード、チャート、実物等の提示の仕方）など教材提示についての評価、【時間のゆとり】問いや指示に対して、考えたり行動したりする時間やゆとりがあったか、【先生の態度】明るく積極的に学習を促すものであったかなど授業運びについての評価など11項目の観点が紹介されました。模擬授業を行う学生は、授業を予定どおりに進めることに一生懸命になり、発問の後、考える時間を設けず、すぐに正解だけを拾って進めてしまうことが多い。これは、実習でも良く見受けられるので、児童の目線になることの重要性を伝えているということでした。

後半は橋本京子先生から授業の実際についてお話を頂きました。学生たちは3回の模擬授業の中で①



②プレゼンテーションを生かしたマイクロティーチング（導入部6分）、③中心発問と教材提示を行うマイクロティーチング（展開部15分）を経験します。一人で模擬授業をするのが初めての学生に対して授業づくりの基礎基本を教えるために、授業の内容、模擬授業、授業の振り返りなどをチームの話し合いで進め、常に「自分ならどのように考えるか」を意識させる、チームで相互評価をしながら課題を解決するという工夫を紹介していただきました。

チームや学生全体に向けた指導だけではなく、個別の指導も組み合わせられていました。

マイクロティーチングについては振り返りレポートを実施し相互評価だけでなく自己評価も通して気づきを深められるようになっており、教員からもアドバイスを返しておられました。また毎時間の振り返りでシャトルカードを活用しこちらにも教員からのアドバイスやコメントを付けておられ、きめ細かく指導をされている様子が伝わってきました。

最後に、今回の研修会に参加頂いた先生方からの感想を以下に列記いたします。

- ・ 普段の授業でグループワークをしています、なかなかうまくグループが機能しないように感じています。本日のご講演の中でグループをうまく機能させるための工夫やヒントを伺い参考になりました。
- ・ 学生の得手不得手の変化等共感できる場所が多く、それに対してどう考えていけばよいのかヒントになることをたくさんいただきました。
- ・ 指導法の基礎にあたる演習について具体的に紹介いただいたので、その後の専門科目の授業の進め方について参考になりました。
- ・ 模擬授業の方法論について、納得しながらうかがいました。マイクロティーチングの指導の際に、活用してみたいと思います。
- ・ 授業の組み立て方やより子どもたちへのアピール度が高くなる手法を学生が身につけられる良い講義を提供して下さっていると感じました。授業は実践と教科の具体的内容を学校の先生がいかに魅力的に展開していくことが重要だと思っているので、将来的にこの2点を融合させた講義などができれば、大変有り難いと思います。
- ・ 学生にコメントをつけるということが時間的になかなかできないのですが、その重要性について再認識できました。
- ・ 西井先生、橋本先生、お二人の学生さんに対する細やかな配慮のなされた授業の実際を伺うことができ、教師としての自分のあり方について、改めて考えることができました。ありがとうございました。
- ・ 50人の規模ですが、1人1人の学生を大変丁寧に御指導くださっている様子に敬服しました。このような基礎があって、教壇実習の実があがっているのだとあらためて感じました。15週間で学生達の学びが深まっていくとのことですが、具体的にどのように学生達が成長していくのかも大変興味がありました。大規模授業での学生の態度については、私も日頃から頭を痛めています。年々「質の低下」を感じます。どのように学生に「人としての根っこの力」を養うのか、今後もFD研修等、様々な機会先生方と議論できればと思います。

3. 平成30年度 京阪奈三教育大学FD交流会

『「持続可能な創り手」の育成の観点から教育実践を考える』

平成30年11月28日(水)13:00~14:30に平成30年度京阪奈三教育大学FD交流会を開催いたしました。本交流会は双方向テレビ会議システムを利用し、映像・音声を主催校の奈良教育大学から本学及び大阪教育大学が受信する形で実施し、本学からは11名の教職員の参加がありました。

当日は『「持続可能な創り手」の育成の観点から教育実践を考える』をテーマに奈良教育大学の中澤静男准教授、河野晋也附属小学校教諭からご講演をいただき、講演後には意見交換を実施しました。

本学の参加者からは「ESDの概念と効果が分かった」「自身の授業の中でESDの考え方を落とし込んだ場合の授業を考えてみたい」「ESDの教育実践例の紹介が参考になった。」「ESDの教育目標となる見方・考え方と資質能力を具体的に知ることができた」などの感想が寄せられました。



4. 滋賀県立大学主催FD研修会

「学生を授業に参加させる秘訣 ―アクティブラーニングの魅力―」

の受講報告

理学科 向井 浩 教授

本年8月10日(金)13:50~16:50に、滋賀県彦根市の滋賀県立大学にて、同大学が主催するFD研修会「学生を授業に参加させる秘訣 ―アクティブラーニングの魅力―」を受講してきました。本学からの出席者として、研修会の内容をご報告させていただきます。

受講のきっかけは、6月26日に、FD委員会委員長から大学教員宛の「FDワークショップのご案内」と題するメールを受け取ったことでした。FDワークショップと記された研修会の内容を、共催する関西地区FD連絡協議会のホームページで確認すると、大学の授業にアクティブラーニングを導入する手法を、ワークショップ形式で教授するものようでした。日頃、学生の授業に対する参加意欲が低いことを問題に感じていたので、アクティブラーニングを授業に取り入れるノウハウを知りたいと思ったのが、参加動機でした。

研修に用いられた滋賀県立大学の講義室は、アクティブラーニング専用に使えられた部屋でした。同大学では、このアクティブラーニング・ルームの稼働率が高く、同様な部屋を増設中とのことで、アクティブラーニングの取り組みが盛んなことが伺えました。アクティブラーニング・ルームの設備は、カーペット貼りの床に可動式の個人用机と3色に塗り分けられた椅子が人数分置かれ、前には書画カメラと電子黒板が1台ずつ、横の壁には取り外し可能なホワイトボードが6枚設置されていました。個人用机が5台ずつ固められて7つの島状に配置されており、参加者34名は、A~Gの7グループ(1グループ4~5人)に分かれて、指定されたグループの机に着席しました。参加者の約1/3は滋賀県立大学の教員で、滋賀県立大学が教員向けに主催するFD研修会に、共催する関西地区FD連絡協議会の参加大学の教員が入り込む形のようなものでした。講師は、滋賀県立大学の教育・学生支援担当理事・副学長の倉茂好匡氏で、活力のある話しぶりに引き込まれるようにして、研修会は進行していきました。

まず、電子黒板に投影された、学習定着率に関するピラミッドの図(図参照)を使って、アクティブラーニングの有効性が説明されました。それによると、学習定着率は、講義Lecture 5%、読むReading 10%、視聴覚教材Audio Visual 20%、演示実験Demonstration 30%、グループ討論Discussion Group 50%、体験学習Practice By Doing 75%、他人に教える経験Teaching Others 90%で、ピラミッドの上から下に示された教授方略、教授方術に行くほど、高い定着率を示すことが述べられました。特に、学生同士が教え合うピア・サポートが有効であることが印象的でした。

研修は、グループワークを主体にして進められ、2課題のグループワークを体験しました。

1つ目のグループワークは、受講者が普段担当している授業科目に、個人ワークあるいはグループワークを組み込んだ「ある一日の授業展開案」を考案し、それをグループ内で紹介し合うというものでした。「ある一日の授業展開案」の考案は研修前の宿題として与えられ、事前に渡された資料を参考にA4用紙1枚にまとめたものを持参して参加していたので、それを使ってグループ内で互いに発表し合いました。

このグループワークにおいては、従来、講義で話していた部分を資料にして講義前に渡し、宿題の課題を与えることで、資料を読ませることが一つの目的であるようです。それにより、Readingによる学習定着率の向上が図れると同時に、グループワークを行う時間的余裕も生まれます。また、互いの発想の違いをシェアし合うことで、ピア・サポートの働きも生まれます。

さらに講師は、グループワークの15分程の時間を使って宿題のA4用紙を見て回り、宿題の評価を短時間で行っていました。評価結果は、「たいへんよくできました」、「よくできました」、「がんばったね」などの文字と可愛いイラストが入った判子をA4用紙に押すことで、即座に受講者に示されていました。講師のこれまでの経験では、この判子を用いた評価方法が思いの外、学生に好評で、評価を巡って学生間で盛り上がるのだそうです。

2つ目のグループワークは、「生活と水」という短編映画（厚生省が水道普及を目的として岩波映画に依頼して製作された昭和27年の映画）を見てグループワークのテーマを考案し、その後、実際に決めたテーマでグループワークを行うというものでした。この中で、テーマの考案とそのテーマでのグループワークの実施という、連続する2つのグループワークを実際には行いました。考案されたテーマは7グループそれぞれで全く異なり、映画に出てきた動物の種類を数え上げる、水道普及のCMを提案する、50年前の水事情の振り返りから50年後の水道システムを考えるなど、受講者の発想の違いに驚かされました。それぞれのグループワークが終了した時点で、各グループからクラス全体への発表が行われましたが、この時、書画カメラが有効に活用されていました。グループワーク時に作成されたA4用紙に書かれたメモ書きを、そのまま書画カメラで写すことで資料の提示となっており、改めて発表資料を作成する手間を省いていました。

この2つ目のグループワークを通してわかったことは、具体的な事物（この場合は短編映画）があれば、そこから如何様にもグループワークを実施し得るということでした。発想を豊かにすれば、アクティブラーニングの題材があちこちに転がっているように感じられました。アクティブラーニングを実際に授業に取り入れることが出来るように思われてきたことが一つの収穫でした。

この研修会の中で、講師が特に強調していたことは、「自分で気付く（わかる）と定着する（忘れない）」ということでした。授業者が一方的に学習内容を伝えるよりも、アクティブラーニングでそれに自分で気付くように仕向ける方が、受講者の学習定着率が高いというふうに私なりに解釈しました。研修会を振り返って見ると、確かにグループワークでの内容は、今でも具体的に思い返すことができます。最初に説明のあった学習定着率のピラミッドが示すようなアクティブラーニングによる定着率の向上を、実際に体験する貴重な機会になったと思っています。

学習定着率「Learning Pyramid」
 (出典：National Training Laboratories)

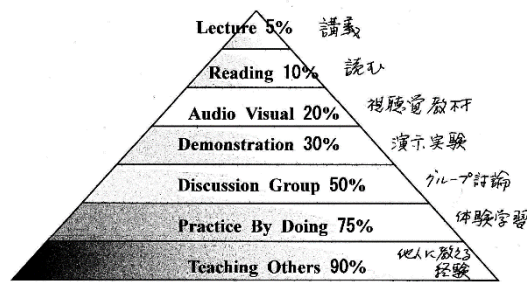


図 学習定着率 (配布資料より抜粋)

【FD委員会からのお知らせ】
他機関で開催されるFD研修会等への参加について

FD委員会より随時、一括送信メールにて他機関で開催されるFD研修会やFDワークショップの案内をさせていただきます。案内させていただきました研修会等につきましては、参加費、交通費をFD委員会の経費で負担させていただきますので、ご関心のある研修会等がありましたら、是非お申し込みください。

問い合わせなどがありましたら、下記の委員までお願いいたします。

FD委員会委員：太田（委員長）、神代（副委員長）、佐藤（美）、小松崎、東村
 （事務担当：河原田、山本、鈴木）